

江口英一君の「現代の『低所得層』——『貧困』研究の方法——」
に対する授賞審査要旨

全三巻一、五〇〇頁余におよぶ本書は、戦後日本における「低所得層」をひとつの社会階層として取扱おうとするものであり、「貧困」を単に個人的ないし偶発的原因から生まれるものでなく、敗戦後の日本経済が復興成長するなかから不断につくり出された大量の働く下層生活者層の問題として理解している点が、特徴である。十九世紀末におけるイギリスの貧困研究に刺戟をうけながら、著者は戦後における研究生活のすべてをこの問題の解明にあてている。戦後日本における「貧困」の特徴は、公的扶助を受けているいわゆる保護世帯だけでなく、さまざまな給源から生み出され、沈下、累積、固定して膨大な「低所得層」が形成されている点にある。単に大都市のみでなく、地方都市においても、農漁村においても、同様なことが言える、と著者は述べている。敗戦直後における窮乏と大量失業と生活の頹廢——例えば、浮浪者・浮浪児、寮舎生活者、街娼、かつぎ屋、闇市など——とは、その後日本経済が復興しはじめ、その再生産軌道が定まった後においても、清算されることなく、不安定就労は深刻化し、拡大され、また固定されていった。この「低所得層」の世帯は、単にそれらが下層の生活層だと言うだけでなく、その雇用がつねに不安定であり、また世帯の生活が一般世帯から断絶孤立化し、また誰もが強い構造的な疎外感もち、やがて「生活崩壊」と著者がよんでいる危機のなかに落ちこんで行く。日本経済のいわゆる高度成長期においても、経済の拡大と

膨脹の裏には、それからとり残され、繁栄の負の面を背負っている多数の貧困世帯が不断につくり出されている。経済発展のもたらす生活費の急騰についていけない階層、消費の刺戟に対応できないところから生み出される強い貧困感、中流意識の増大が云々されながら、その稼働人口の底辺に累積している厚い「低所得層」と、かれらについてまわる雇用不安という事実こそが、現代における「貧困」の根幹だと著者は述べている。通例の賃銀労働者と労使関係からは一線を画されているこの働く「低所得層」の大量的存在を指摘している点が本書の特徴であり、従来の貧困研究に見られなかった点である。

本書で「低所得層」とよばれ、従来貧困問題の圏外におかれてきた特殊な社会階層は、その最低限度の生活が公的に扶助されている最下層の生活窮迫者、いわゆる保護世帯七十五万余ではなく、これらの保護世帯と境を接している、雇用の不安定な各種の下層日雇労働者世帯を中心とする生活者層である。かれらは何れも、さまざまな雇用労働者や事務従事者のうち、不況期に失業したり病欠欠勤のままその雇用の場を失い、保護世帯の一步手前で雇用のごく不安定な雑労働の日雇に従事する人々である。このように考えて著者は、通例の雇用から落ちこぼれ、そのまま沈没してしまった人々、また、生活保護法の保護世帯ではないが、それに隣接し、それと交流し、事実上保護世帯の予備軍である下層の日雇雑業の従事者や、単に「名目上の自営業者」であるにすぎない露店、呼売などを「低所得層」と名付けている。この「低所得層」と公的扶助の対象である保護世帯とを総括的に把握するのでなければ現代日本における「貧困」問題は正しく理解することはできない、と著者は言う。換言すれば、通常の雇用労働者や自営業者と公的扶助の対象である保護世帯との中間には、職業経歴の半途で、失業、疾病、災害、倒産などによって、雇用のきわ

めて不安定な最下層の日雇雑業などにおちこんでしまった膨大な数の人々、つまり「低所得層」とその世帯が、特殊な生活構造をもちながら、存在していることが見のがされていた、と言うのが著者の新しい問題提起である。

著者はさらに、「貧困」を一つの社会階層の現象として捉える概念として、近年の貧困研究の方法にならって〈Deprivation〉という言葉を用い、最低生存の所得水準のみを中心としたいわゆる「貧乏線」^{ポヴェリ・ライン}の思想だけでは今日の「貧困」の実態を把握することはできない、と述べている。此処では、単に所得が通例の水準を著しく下廻っていると
言うだけでなく、世帯の生活が社会的に孤立化し、住居、医療、教育、文化などにおいて、人間として当然に与えられるべきものが欠落し、「人並み」・「世間並み」の最低生活が営めないでいる「不安定就業階層」が問題だとされている。そこで今日では、公的扶助を受ける保護世帯と、この「低所得層」ないし「不安定就業階層」、つまり〈Deprivation〉の中の社会階層とを一括して考察することが、現代における「貧困」研究の方法だと言うのが本書の主張である。

長い年月をかけて蒐集された膨大な資料の解析と時間のかかる聴きとり調査の累積をふまえ、「貧困」についての新しい視点を提示し、「低所得層」を一つの社会階層として理論化し、この研究分野に新しい問題提起を行った点が本書の功績である。さらに、戦後日本の歴史のなかで忘れられ置き去りにされやすい「貧困」という問題の中心に「低所得層」という新しい社会階層の存在を据え、その特質の分析について、経済学的手法や社会学的手法を駆使して、一種の学際的研究としての成果をあげている点をとくに評価したい。通常の雇用労働者や自営業者の生活と生活保護法の保護世帯の生活との中間に、幅のひろい、そして働きながらも下降沈没していく「低所得層」という数量化

しにくい特殊な階層の動態を、綿密な手法で追跡し解明した点は、今後における貧困問題研究に新しい指標を与えるだけでなく、また、わが国における社会福祉をめぐる政策決定にも貢献するところ大であろう。